

リプロダクションをめぐる 精緻な実証研究

小浜正子著
一人っ子政策と中国社



A5判 392頁
京都大学学術出版会
[本体 3,000円 + 税]

及川 淳子

中国社は急速に変容しており、複雑多様化する諸様相を読み解くことは容易ではない。中国の現実を見つめるほどに、自らの視点や研究方法に対する省察を迫られる。現代中国に対する実証的な研究には、政治的に敏感な問題も避けられない現実との緊張関係を誠実かつ謙虚に受けとめ、研究対象に向き合い続ける一種の覚悟ともいべきものが必要ではないかと評者は考えている。

本書は、そうした研究者の矜持に満ちた大著である。中国近現代史を専門とする著者の小浜正子氏は、中国女性史や上海史に関する数多の研究で知られ、本書『一人っ子政策と中国社』は満を持して上梓された労作といえよう。

一九七九年から二〇一五年まで続いた「一人っ子政策」は、

中国の社会構造を大きく変容させた。人口抑制を目的とした「人類の壮大な実験」は、中国の発展に多大な影響を及ぼしたが、強制的な避妊や中絶などの悲劇を想起せずにはいられない。現在は、二人目の出産も全面的に認められるようになったが、「一人っ子政策」の功罪は依然として中国社に有形無形の影響を与えている。

本来、子供を産む／産まない、いつ、何人の子供を持つかという意思決定と行動は私的領域の問題であり、自己決定権に国家権力が介入すべきではないという「リプロダクティブ・ライツ（性と生殖に関する権利）」は普遍的な人権である。だが、中国では生殖コントロールが政策として施行され、「国家による『生』の掌握」が行われた。

著者は、「国家の生殖への介入」を「生殖の公領域化／国

「家化」として、その過程を詳述する。だが、本書は生殖の「私領域化」あるいは「公領域化」という単純化された二項対立の議論ではない。本書の目的は、「リプロダクションすなわち次世代の育成は、産む女性とそのパートナー^{エイジェント}や家族、育てる人の職場や地域社会、国家とその代理人である家族計画のスタッフや行政幹部および医療者、さらには国際社会までの各種のアクター＝ステイクホルダーが、多様な交渉を展開するアリーナである」（三四六頁）という複眼的視座によって、多様なアクターがそれぞれの立場で関与する力学を解明することにある。その精緻な実証研究は、著者自身が批判する「ジェンダー視点が弱い日本の中国研究の欠点」（三六一頁）を補完してなお余り有る貢献といえよう。

本書は、読者が理解を深められるように思考をめぐらせた著者の周到な配慮によって構成されている。序章に続く解説では、アジア近代のリプロダクションをめぐるテクノロジイや政治の変容について論じられている。続く第一部では、ジェンダーとリプロダクションの視点から中国の人口問題と計画出産を概観し、第二部では上海の計画出産について、そして第三部では遼寧省Q村と湖南省B村を実例として農村における計画出産の変容について詳述している。約半世紀にわたる歴史的な時間軸と三つの地域の実例から、本書の課題を立体

的に浮かび上がらせているといえよう。また、六編のコラムは、著者が随所で指摘する「中国社会のバリエーションの幅」を理解する助けとなり、豊富な図表や写真、当時の雰囲気を与えるイラストなども効果的に配置されている。

紙幅の制約もあるため、ここでは各章をそれぞれ要約することはせず、評者の視点から本書の特徴について以下の三点を指摘したい。

第一は、歴史研究と現状分析の相互作用である。著者は歴史研究者として、中国の近現代を俯瞰した長期的な視点による議論の重要性を説いている。本書は一九五〇年代から二一世紀初頭までの約半世紀を対象としており、歴史研究ならではの指摘がなされている。その顕著な例をひとつ挙げれば、本書が「一人っ子政策」を書名に掲げながら、「計画出産（計画生育）」という用語を意図的に多用している点だ。国策としての「一人っ子政策」は一九七九年に開始されたが、出産を制限するという意味での「計画出産」は以前から実態があった。例えば、「一九五〇年代の上海における出産の近代化・医療化・施設化は、母子の生命の危険が大幅に減少したことと、国家による『生』の掌握が進んだことによって、二重の意味で上からの計画出産推進の条件を創出するものであった」

(二二七頁)と指摘し、上海において「一人っ子政策」が早期に定着した歴史的な経緯を明らかにした。

「計画出産」をめぐる議論では、中国社会の現状に対する分析も展開されている。著者の友人の中国人女性との会話から、「計画出産」は「産児制限」や「バース・コントロール」と訳すほうが実態に即しているという気付きを得られたエピソードは興味深い。また、「出産を制限する政策と、そのため的手段である生殖コントロールがおなじ『計画出産』という言葉で表現される」という「中国社会における独自の捉え方」を指摘している(五頁)。本書は膨大な文献史料と豊富な口述資料が用いられており、歴史研究に依拠した現状分析という相互作用による貢献が大きい。インタビュウの成果は、まさに、著者による歴史研究と現状分析の真骨頂といえよう。

特筆すべき第二は、徹底した当事者研究である。著者は、「一人っ子政策」をめぐる先行研究に対して、「女性は政策の対象あるいは受け手と捉えられているだけで、その主体性に注意されることもあまりない」(二三頁)と批判する。そこで、「国家の経済発展の視点からの評価だけでなく、生殖の当事者である女性の立場からの検証が不可欠だ」(三七頁)と強調し、「当事者」である女性の視点、特に女性の「主体性」を重視している。

大都市の上海、遼寧省Q村、湖南省B村という三つの異なる特徴を持つ地域におけるインタビュウでは、出産経験のある女性のみならず、計画出産に関する仕事に従事していた女性も「当事者」として着目し、「リプロダクションをめぐる政治——身近な人々との交渉」(三七頁)について、中国の共同研究者と共に丹念な聞き取り調査を行った。出生率を低下させようとする政治権力は女性たちに計画出産を強制したが、一方、女性たちは労働や家事・育児などの多様な負担の中で計画出産を積極的に受け入れた側面もあった。都市と農村という社会構造の違いはあっても、女性たちが、なぜ、どのように、「産む／産まないを選択し決定する行為主体」(二六六頁)となったのか、そして「なぜ中国では国家が生殖に介入することが自明視されるようになったのか」(二七五頁)、徹底した当事者研究から計画出産をめぐる力学についての解明を試みた著者は、本書のあとがきにおいて「置かれた環境の中で喜怒哀楽や戦略的思考を持ちながら精一杯生きた、生身の中国女性が感じられた」(三六〇頁)と結んでいる。

第三の特徴として指摘すべきは、比較研究の視点を読者に提供している点である。著者は、本書で考察した課題を中国社会の特殊性として論じるのではなく、「中国各地の過去半世紀のリプロダクションの変化を、アジアの他地域、とりわ

け日本をはじめとする東アジア地域と比較しながら、その歴史的な意味を考察しよう」（三四六頁）と主張し、研究の意義と価値をさらに開かれたものとしている。著者自身が指摘するように、「それぞれの国の生殖コントロールの普及の状況は、その社会の当該時期の、人口構造、政府の施策、ジェンダー構造、技術的条件などさまざまな条件を反映したものとなる」（二六六頁）。時代背景や社会構造の異同については、さらなる議論の深化を期待したい。

著者は、現在の日本社会に対して「生殖（リプロダクティブ）の自己決定権（ライツ）が権利として確立しているわけではない」と痛烈に批判する。そして、女性たちが「それぞれの現場で多様な交渉を繰り返して、生殖する身体を自身で統御して実質的なリプロダクティブ・ライツを獲得しようとしてきた」と指摘し、「中国のリプロダクションをめぐるシステムは、現在も多様なアクターの交渉によって再構築されつつあり、それは日本を含むアジアの社会とつながっている」と結論づけている（三四九頁）。こうした議論は、急速な少子高齢化という共通の課題を抱える東アジア、とりわけ日本と中国において、今後の社会構造の変容について考察する上でも有益な視座を提供するだろう。

以上、本書の特筆すべき三点について、本文を引用しつつ紹介した。最後に、評者の関心に引き寄せて、現代中国社会について考察する際の視点について述べたい。著者は「中国国内の計画出産への評価を、国外の価値観を基準に切って捨てるより、彼らがするように評価する社会的実態とその文脈コンテキストを理解することに務めたい」（二二頁）と説いている。例えば、中国における民主、自由、人権などに関わる問題は、普遍的価値と対峙する中国の特殊性として批判されることが多い。普遍的価値である以上、その普遍性を追求する必要はあるが、それと同時に、現代中国の「社会的実態とその文脈」についての考察が必要不可欠である。普遍性と特殊性の問題に埋没するのではなく、いかにして研究対象に向き合い、実証研究を徹底するか、本書から学ぶことは多い。

本書のインタビューでもっとも印象深かったのは、「当事者」である女性たちの「たくましさ」あるいは「したたかさ」とも言うべき生き様である。「主体性」について言えば、近頃は二人目の出産にあたり、母親の姓を子供に継がせるケースも増えつつあると聞く。「姓」をめぐる女性たちの「主体性」について、著者はどのように評価するだろうか。中国社会における「生・性・姓」をとりまく諸課題について、本書を手掛かりに考察していきたい。

（おいかわ・じゅんこ 中央大学）